

# 未来ノート

-202Xの君へ-

## ラグビー

まつ しま こう た ろう  
**松島幸太郎**



●2016年のアルゼンチン戦で突破する松島(左)シャークス時代の松島。2季目には19歳以下のチームの先発に定着してチームのMVPに。左腕にチームからもらった記念の時計をつけて  
112012年11月

### 恩師の勧めで海外挑戦

自分だけの進路

お母さんの手紙

南アに生まれて

代表のエースへ

ラグビー日本代表の松島幸太郎(25)は8年前の初夏、恩師から思いがけない進路を勧められた。

神奈川・桐蔭学園高の藤原秀之監督に「海外はどうか」と持ちかけられたのだ。松島は仲間と同じく、大学進学を考えていた。全

国高校大会に1年生から出場していた「超高校級」の逸材は、強豪校から引く手あまただった。

ただ、その時は不思議と素直に提案を聞き入れた。「それもいいかも」。母の多恵子さんも後押しした。「だって、あんなに勉強し

ない子が大学に行ったって仕方がないでしょ」と笑って振り返る。

ラグビーの場合、トップレベルの高校生には、有名大学↓トップリーグ加盟の大企業という「エリートコース」が用意されている。しかし、藤原監督には、彼の才能を大学の枠に収めてはもったいない、との思いがあった。

「体のしなやかさ、切れ、強さ、そして危険な能力。教えても教えられないものを持っていた」。ジンプエ人の父と日本人の母を持ち、南アフリカで生まれた松島。南アのチームならば、外国人扱いされず、出場機会をもらいやすいという計算もあった。冬の全国大会で桐蔭学園を初の日本一(東福岡と両

校優勝)に導く原動力となった松島は卒業後、南アのチーム「シャークス」の育成機関へ。ただ、1年目は苦労した。太もも裏の肉離れが相次ぎ、半年近くプレーできなかった。監督や支援者とのテレビ電話。「帰ろうかな」。弱音がこぼれた。

翌冬。一時帰国した松島は、20歳以下(U20)の日本代表チームに呼ばれた。「行きたい」。藤原監督は、そんな教え子を高校の体育教官室に呼び、雷を落とすとした。「お前の目標はそこなのか。海外で活躍するんじゃないかったのか」。松島はU20への参加を断り、覚悟を決めた。本場でプロ選手への道を切り開く、快進撃の始まりだった。(野村周平)

◆「未来ノート」スクラップブックは、全国のASA(朝日新聞販売所)でお配りしています。インターネットの特設ページではイベントやスクラップブックについて詳しく紹介しています。「未来ノート 朝日新聞」で検索してください。

©朝日新聞社 無断複製転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。